

奥 祥子教授を偲んで

大学院看護学研究科長 牛尾 禮子

前看護学部長で6月に亡くなった奥祥子さんの追悼文を書くよう、大学院の論究編集委員長から依頼された。しかし、平成2年1月に母を亡くし、彼女とは、27年来の親しい友人であったため、大切な人を二人もなくした私は、涙があふれ、なかなか書く気持ちにはなれなかった。再び編集委員長から「奥さんがこの大学にいたという証を残してあげないと」と言われ、私は、その通りだ、拙い文章でも書き残さないといけないと思い、PCに向かった。

私が、奥祥子さんと出会ったのは、平成5年である。その当時、看護系の大学院は国内でも極めて少なく、常磐大学人間科学研究科が、社会学、社会福祉学、教育学、心理学、看護学など多くの修士生を受け入れており、そこで、奥さんは私の一つ後輩として出会った。この大学院は、学部卒生もいるが、大学院生は、北海道から九州まで、さまざまな年齢の人が来ていた。私たちは、時間があるものだから、ゼミ担当の教授と、共同研究室で、夜遅くまで語りあい、よく食べ、少しばかりのお酒を飲んだ（今では大学内での飲酒は禁止されていると思う）。那珂川の河原で芋煮会をした。清里で地域の人たちも交えて合宿もした。また、友人たちと下宿に集まり、きりたんぼ鍋のパーティを何度も開いた。彼女は、集まる下宿先の人に「私が行くから綺麗に掃除をしておいてね」とよく真顔で言っていた。秋田から来た人は「うんだ（いいよ）」と返事した。彼女にとっても懐かしい思い出であろう。彼女は、本当に綺麗好きであり、他にも食事した後は素早く片付け洗うなど、数々のエピソードがある。私は、彼女とは性格が全く違うと思うが、よくも27年間、長く付き合えたものだと、彼女に感謝している。

奥さんは、いつも研究の話をしており、離れてても「クラスター分析の本を買って読んでおいて」、「早くまとめて送って」などと指令が飛んでくるのがしばしばあった。いつも真面目に学問に向き合い頑張る人だった。そんな彼女は、常盤大学大学院人間科学研究科で「高齢者における配偶者との死別に関する研究～死別後の心理的变化を中心にして～」という題名で修士（人間科学）を取得し、鹿児島大学医学部で「一般病棟での終末期ケアが臨終に関わる家族ケアに及ぼす影響」という題名で博士（医学）を取得している。

彼女は、修士課程を修了すると地元である九州に帰り鹿児島大学医学部で職につき、平成17年には福岡県立大学看護学部、同大学院看護学研究科、2年後には、自宅がある宮崎大学医学部で研究活動を精力的に行っていた。講義でも主として、がん看護学、ストレス対処看護学、ターミナルケア論などを担当していた。また、科学研究費補助金の獲得も多数ある。さらに、学会においても、がん看護研究会会長、

日本死の臨床研究会九州支部役員, 日本がん看護学会代議員など, 「がん」に関する研究会, 学会に携わっている。彼女は, 一貫してがんに関する研究に取り組み, 施設や地域に貢献してきた人である。

私は, 姫路大学に大学院修士課程をつくるために, 平成27年に着任し, 設置申請の準備にあたった。設置のために広く教員をさがしていたところ, 「私が行ってもいいよ」と言ってくれた。宮崎からここに? 高齢になった母親を残して兵庫県に来る・・・本当? とびっくりしたことを覚えている。彼女は, 姫路に引っ越してきた。遠く離れた母親のことなど, いろいろ思うことがあったと思うが, そういったことはみじんも見せず, あらゆることに精力的に, 懸命に取り組み, 何事も妥協を許さない人だった。続いて博士課程を設置する時も準備室長補佐として, 多くの課題を丁寧に検討し, 意見をいい, 設置に貢献してくれた。

看護学部学部長になってからも, 学部経営に一生懸命であった。学生のこと, 教育課程, 人事など学部で解決していたが, 時に私に相談することもあった。しかし, しばしば私と意見があわないこともあり, 本気で言い争った。だが, 次の日には二人とも何事もなかったかの様に普通に話しをしており, 何でも言い合えるきょうだいのような存在だった。

彼女は, 病を抱え, どんなにしんどくても, 仕事には妥協しない人だった。大学にも遅くまで残り仕事をしていた。夏の暑い日も, 実習施設に行き, 病院に治療に何回も通った。「しんどかったら休んだらいいのに」といっても「学部長だからやらないといけないのよ」といい, また長時間の会議にも疲れを見せなかった。しかし, 抗がん剤の治療を続けながらの仕事は, 通勤するだけでも大変だったと思う。副作用もあっただろう, 食事の量も少なかった。しかし, 弱音を吐かず頑張り抜いた。彼女のような気力を持ち続ける人は他にいないと思う。本当に驚くべき人であった。彼女は, 何事も決して曲げることはない, 確固たる信念をもち, 自分にも他者にもきびしい面があったが, 自分のことより他者を思いやるという優しい心の持ち主でもあった。

奥祥子さんは, 令和2年6月14日に, 63歳という若さで天国に旅立った。がんに関する研究者であった彼女は, 奇しくも「がん」で倒れた。しかし, 彼女は, がんに関する多くの知識をもつ研究者だっただけに, 病を抱えながらも, 自分らしく生きることができたと思う。強く, 逞しく, 気高く, 最後はQOLの高いがん患者として63年間を生ききった。

私は, この文章を書くにあたって, 「一生懸命」という言葉を無意識に何回か使ってる。彼女は, まさにそういう人だった。これから, 研究者として, 教育者としてもっともっと活躍できる人だった。大学にとっても, 私にとっても大切な人だった。

今は, 天国で看護学部や大学院を見守ってくれていると思う。彼女のぶんまで頑張らなければと思う。また, 涙ぐんでしまうが, 最後に奥祥子さんに告げたい。「ありがとう」「あなたは偉大な人でした」と。